

公益財団法人東京都私学財団

2021 年度私立学校研究助成事業 報告書

「なだらかな接続」に向けた幼稚園および 小学校における施策に関する研究

2021 年 12 月
明星幼稚園

はじめに

2017年の改訂・告示された幼稚園教育要領等と小学校学習指導要領では、幼児期の教育による「育ち」と小学校の教員による「学び」をつなぐことが提示され、そして、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が幼稚園教育指導要領等に示された。従来、交流を中心に行われたり、支援を要する子どもに関する申し送りをしたりといった「連携」から、「教育の接続」へと変化している。それは、幼児教育と小学校教育（義務教育）という異なる文化の接続であり、保育園や幼稚園での学びを義務教育における学びへつなげるステップアップをした接続となる。子どもは保育園や幼稚園において遊びを通した学びを経験しており、小学校はゼロからのスタートではない。異なる文化間を移動する子どもたちのつまずきや戸惑いという段差をなだらかにするためには、学びや育ちに視点を置いた「なだらかな接続」が求められるのである。

そこで本研究では、「なだらかな接続」に関する文献調査をふまえ、先進事例となる3か所への聞き取り調査やセミナー参加などを行い、そこで得られた情報をもとに、明星学苑における幼稚園と小学校間の接続のあり方について模索した。

幼小接続に関する一般的な課題としては、教員については幼小間で実際にお互いの教育現場を見る体験がなく、子どもの成長のイメージが異なっていること、幼小期を見通した一貫性のある教育カリキュラムが組まれていないこと、子どもを中心とした主体的な育ちや学びの視点に立った学習観よりも、教師の視点に立った教育観という従来のモデルから抜け出ることができていないことなどが考えられた。一方で、先進事例の聞き取り調査等からは、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムを強化・充実させ、教員間の授業参観や交流による実態把握を促進させたり、教員のみならず管理職の意識改革なども進めたりしていることが分かった。さらには、幼稚園から高校までの一貫性を持ったプログラムを用意して、幼稚園から高校までの学校独自の文化やスタイルを確立し、法人全体としての特色やブランドづくりをしているところもあった。また学校間の人事異動も行い、小学校の教員が幼稚園で指導をする経験を持つなども効果があることが分かった。また、保護者への配慮も必要であり、幼小のなだらかな接続は保護者の不安を軽減し、家庭教育の支援に役立つように、広い視野で考える必要性もある。

本報告書では、これらの研究結果で得られた改善へのヒントを、明星学苑における「なだらかな接続」についての方策に活かすことを提案した。そこでは具体的に、幼小接続の方針を立て、幼稚園ではアプローチカリキュラムを整備すること、小学校では幼稚園教育要領で示されている「生きる力の基礎」を育む3つの資質・能力（知識・技能の基礎、思考力・判断力・表現力等の基礎、学びに向かう力・人間性等）に加え、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をふまえて、小学校学習指導要領のねらい（知識及び技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性等）の基礎的なものを土台に、スタートカリキュラムの策定が求められた。本報告書が、次へのステップへの参考となることを願っている。

「なだらかな接続」に向けた幼稚園および 小学校における施策に関する研究

関田 祐子（明星幼稚園）、河浦 晃子（明星幼稚園）、秋山 博子（明星幼稚園）、
山浦 紗妃（明星幼稚園）、中江 正司（明星小学校）、岡崎 達一郎（明星学苑）

1. 研究に至った背景

幼稚園・保育園から小学校へ就学すると椅子に座り、学習目標の到達に向かい教科書の順を追って学習を進めていくことが当たり前のように感じられる、と吉永杏里氏（國學院大學人間開発学部准教授）は指摘している（『國學院大學メディア』, 2019）。子どもたちは幼稚園・保育園と小学校の大きな段差に時につまずき、戸惑い、乗り越えることに困難をかかえているのではないのだろうか。このような段差を低くし、なだらかな接続（学びをつなぐ）を実現していくために有効な施策とは何だろうか。このような疑問を背景に、「幼小接続」をどのように進めていくかを考察していく必要性について、今回研究するに至った。

近年「幼小接続」という言葉をよく耳にするようになった。その言葉が注目される直接的な背景には、1990年代から社会問題となっている小学校入学後の落ち着かない状況がいつまでも解消されず、「教師の話を聞かない」、「指示通りに行動しない」、「勝手に授業中に立ち歩いたり教室から出て行ったりする」など授業規律が成立しない状態へと拡大していく「小1プロブレム」の問題があった（大江・永利, 2017）。当時原因としてあげられたのは、自制心や規範意識の希薄さや、生活習慣の確立が不十分であることであった。この解消には幼稚園・小学校の教科・生活面での円滑な移行が必要であると主張され、この社会問題から教員たちも現場のギャップに目を向け、対応しようと試みた。既出の吉永杏里氏によると、同じ頃、就学前の幼児教育の重要性が取り上げられたが、この時期の接続は「学校不適応」対策が中心となり、学校生活への適応を指導することが「幼小接続」の取り組みだという誤解が生じてしまった。しかしながら、新たな取り組みとして、幼稚園児と小学生との交流や、就学前に園児の様子を指導要録等で小学校教員に申し送りをするなどの連携が増えていったことも事実である。一方で、特別な支援を必要とする子どもにのみ焦点が置かれていたことは否めない。

その後、「教育の接続」に重点が置かれるようになると、接続期の円滑な移行が課題となり「教育課程の接続」が求められるようになった。2017年に改訂・告示された幼稚園教育要領等と小学校学習指導要領では、幼児期の教育による「育ち」と小学校の教員による「学び」をつなぐことが提示された（木村, 2019）。そして、「幼稚園教育において育みたい資質・能力および幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が幼稚園教育指導要領等に示され、幼稚

園教員（保育者）と小学校教員が5歳児修了時の姿を共有することにより幼小接続の一層の強化が図られることとなった。幼児教育には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて、一人ひとりの発達に必要な体験が得られるように環境を構成したり、援助を行ったりすることが求められる。他方の小学校教育には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて指導を工夫することにより、小学校教育がゼロからのスタートではないことに加え、「主体的に学べるように工夫すること」が求められる。これにより幼稚園・小学校との交流が多くなっていき、「一緒に遊ぶ」、「給食を食べる」、「小学校を訪れて案内をしてもらう」、「教えてもらう」など学校・園、自治体等によって様々な活動が繰り広げられるようになってきた。また、幼稚園教員（保育者）と小学校教員の交流を持つことも増えてきている。本来、園児と小学生との交流は「なだらかな接続」を推進する目的と捉えることが必要だが、交流自体が目的となり、奔走して計画を立て、交流自体に成果を求めがちである。また、幼稚園時代の子どもの育ちの情報を小学校の指導に活用することが大切だが、特に「気になる子」に比重があることが幼小連携の目的とされていることも見受けられる。

冒頭の子どもたちの段差解消の推進には、幼稚園と小学校の学校文化の違いが大きく関わっている。この違いを埋めて学びをつなげていくために交流からステップアップした次の段階にたどりつき、必要な施策を提示するため幼小接続の実情と課題、そしてそのあり方の研究を行った。

2. なだらかな接続に向けた小学校と幼稚園の諸課題

初めに、「なだらかな接続」に向けた小学校及び幼稚園のそれぞれの課題を論じることとする。あわせて、複合的な課題についても言及することとしたい。

2.1. 小学校側の課題

小学校としては、子どもの幼稚園での生活やその違いを知り、またそれまでの成長を把握し、小学校での学びへと徐々につなげていくことが必要である。

しかし、小学校の教員にとって、入学前の園での保育の場を直に見る機会は乏しく、日々の保育活動がどのようになされ、園児たちの活動への興味関心や、理解度、成長度合いなどを知る機会も少ない。幼保教員との情報共有の場も、同じく乏しい。

自治体によっては、教育委員会を含めた幼保小の組織ぐるみの取り組みの中で、理解を深める機会を積極的に作ろうとしているところもあるが、それも、それぞれの自治体の判断に任されており、全体的な取り組みとはなっていない。

また、入学前の保育の意義を積極的に知ろうとしない小学校教員も一般的に少なくなく、小学校教員側の意識の希薄さも接続が深まっていけない一因となっていると思われる。中には、小学校での生活に困らないように、幼稚園や保育園で育ててきてくれればよいと、その責任を幼保任せにする考え方が存在することも否めない。

2.1.1. 「お世話する」から「お世話される」へ

幼稚園を卒園して小学校に入学すると一番年下の学年となるのが小学1年生である。いわば、世話をされる立場となり、何もできないかのような扱いに自然となってしまう。幼稚園では一番上の学年であることから、年下の世話をし、活動や遊びのなかで主体的に動いていた子どもが、小学校に入学するやいなや「枠組」に入った方向が示されるといった状態になってしまう。本来は幼稚園で積み上げてきた育ちを把握し、つなげることが必要である。1年生ではゼロからのスタートではなく、主体性を活かすことを大事にしなければならない。「～しなさい」ではなく、「どう思う?」、「どうしたい?」という教師のアクティブラーニングのスタンスが何より重要である。

2.1.2. 生活リズムの変化

無藤隆氏（東京大学大学院教育学研究科教授）によると、幼稚園と小学校では、生活が大きく違うことへの配慮が必要である。「45分間座っていること」、「手をあげての発言」などは、小学校の生活のスキルとして必要ではあるが、徐々に移行していけるように少なくとも1年生の1学期は、幼稚園で過ごしていた生活を取り入れていくべきである（ベネッセ教育総合研究所, 2012）。寶來生志子氏（横浜市立恩田小学校長）によれば、例えば登校後、「幼稚園で慣れ親しんだ玩具で遊ぶ時間を設ける」、「慣れ親しんだ本を見る」、「一日の時間の区切りを緩やかにする」、「授業の集中時間を短く区切る（例えば15分間等）」とするなど、安心して小学校生活に入り、過ごしていけるようにしていきたい、としている。不安から見せる様々な問題による「困った子」は実は「困っている子」なのである。

2.1.3. 小学校教員の意識

既出の無藤隆氏は、学習指導要領に沿って一定の時間内で必要な学習内容を身につけさせる必要があるという観点から、「教えやすさ」が優先され、「集団生活をする上での基本が揃っていればよい」と小学校教員が考えがちであるのが実情であり、また、子ども一人ひとりの育ちに関してはなかなか強い関心を持つことが難しいとされ、改善を要する点である、と指摘している（ベネッセ教育総合研究所, 2012）。

2.2. 幼稚園側の課題

前述のとおり、遊びから総合的に学び、育っていく子どもの育ち・学びの芽生えを捉え、その資質を伸ばしていくことが必要である。

2.2.1. 年長後半の重要性

年長後半の時期は小学校への準備期間のみにとらわれない保育カリキュラムを構築していくことが大切である。読み、書き、計算や長時間椅子に座る練習をさせることが「接続」ではない。園児の興味や関心に基づき、様々な活動に取り組み集中力を高めることや、最後ま

で取り組む根気強さを養い、活動から生まれる気づきを大切にすることが求められる。この時期、教員（保育者）が方向づけた課題に対して、数人の気の合った仲間（お友達）だけで活動するのではなく、クラスとして目的を意識したり、自分の役割を理解し、集団として取り組み、結果的に皆で達成感を味わったりする活動が重要になってくる。そのことが小学校での教科学習につながっていくと考えられている（大江・永利, 2017）。

2.2.2. 「育ち」の視点

遊びの中の学びを教員（保育者）が観取ることが大切である。幼児期は遊びの中から多くを学び取るが、漫然とした遊びの中からでも教員（保育者）が学びの芽を観取り、アプローチしていくことで学びが始まり、深まっていくことがある。幼児期の遊びの中には、常に「学び」が存在していることを忘れてはならない。

大江・永利（2017）によると教師がそのことを意図できず、「～を味わう」、「～を経験する」という言葉で表される保育活動の目標に終始しては、「学び」という「育ち」の視点から子どもたちを見ることができにくくなっている可能性もあるとしている。教員（保育者）は日々の保育内容や子ども同士のトラブル等の問題解決、生活習慣の確立などについて指導方法の経験を積み、スキルを向上させていくことが一般的である。しかし、一つひとつの活動からどのような学びが期待できるかまで、「育ち」の視点から深く考察することが少なかったと言える。

教員（保育者）は柔軟な感性でアンテナを張り、子どもの興味、関心、気付きを捉え、子どもの学びがさらに深まるような環境設定をしていけるようスキルを上げることが大切である。

2.3. 幼小連携に関わる課題

幼稚園での教育と小学校教育の違いがお互いに十分理解されていない現状では、幼小の関係は交流にとどまり、教育課程の接続を考えることはできない。連携も単発の交流となりがちで、また交流自体が目的化し、それで完結している現状も多い。幼稚園から小学校へ移行していく段差を低くし、学びをつなげていくために、幼稚園年長組の後半から小学校1年生前半までの子どもの姿を、共通認識を持ったうえで、なだらかに接続することを目指した教育課程（カリキュラム）が必要となってくるのではないだろうか。本来、「幼保小接続に上下なし」と言われるように、園児、児童の健やかな成長のために互いの歩み寄りを進め、忌憚らない意見交換ができる関係性の構築が望まれる。

幼児教育は「環境を通して行う教育」である。遊びから総合的に学び、気づきが生まれてくることで学びに向かう力がさらに育まれていく。幼児教育では教員（保育者）は直接子どもに対して働きかけるのではなく、幼児一人ひとりの行動の理解と予想に基づき、子どもが興味を持って環境に関わり、主体的な活動がなされるように、環境に教育的価値を含ませて構成していく（文部科学省, 2017）。その結果生まれる子どもの自発的な遊びにおいて、様々

な態度や能力を身につけていく。一方、小学校教育は「学習目標の到達に向かう教育」である。到達目標が先にあり、そこに向かってカリキュラムに沿って進んでいく。小学校では、まず教育のねらいがあって子どもに活動させるという方向で授業が進められていく。教育の違いから教員の関わり方の違いが生まれてくるのは当然のことであろう。

表1 幼稚園・小学校の特徴（「違い」）[出典：文部科学省「幼児期の教育と小学校教育の接続について」，2010，p12]

幼稚園・小学校教育の特徴(「違い」)		
＜教育の特徴＞		
教育のねらい・目標	幼稚園 方向目標 (「～味わう」「感じる」等の方向づけを重視)	小学校 到達目標 (「～できるようにする」といった 目標への到達度を重視)
教育課程	経験カリキュラム (一人一人の生活や経験を重視)	教科カリキュラム (学問の体系を重視)
教育の方法等	個人、友達、小集団 「遊び」を通じた総合的な指導 教師が環境を通じて幼児の活動を 方向づける	学級・学年 教科等の目標・内容に沿って選択され た教材によって教育が展開
＜教育要領・学習指導要領＞		
幼稚園	低学年 小学校	中・高学年
健康 人間関係 環境 言葉 表現	国語	国語
	算数	算数
	生活	理科
		社会
	音楽	音楽
	図画工作	図画工作
	体育	体育
	道徳・特別活動	道徳・特別活動・総合的な学習の時間等

表1のような教育の違いを理解することは「接続」を考えるうえで重要なことである。お互いの教育を尊重しつつどちらかが歩み寄るのではなく、双方歩み寄る必要がある。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（文部科学省，2017）を共有することで、小学校入学時の姿がゼロではない、という認識につなげるとともに、幼稚園時代からの積み重ねがあることを理解することが必要である。小学校1年生はゼロからのスタートではなく、様々なことを経験して一人ひとりが身につけてきていることを活かしながら小学校生活をスタートさせていくことが望ましい。いわばどのように育ってきたかを見通した教育が小学校では求められる、ということである。

すなわち、幼児教育と小学校教育の理念と方法の理解を相互に進め、幼児教育の成果を小学校へ活かし、また小学校への展望を持って幼児教育のカリキュラムを見直す必要がある(岸野・無藤，2007)。相互の教育を理解するためには、お互いの保育・授業を見学、参加、経

験することや、共有した経験等を相互に語り合う場が必要である。秋田（2013）によると連携には小学校と幼稚園の上下はないことを前提とし、幼稚園と小学校双方の教員の意識が合致し、お互いを尊重しながら協働してカリキュラムの作成にあたっていくことで、「連携」から次のステージへ、すなわちカリキュラムの「接続」へと向かうことができるのではないだろうか。

3. 本研究の調査結果

本研究では、幼小の「連携」や「接続」に関する文献調査及び聞き取り調査等を通じて、幼小のなだらかな接続に向けた課題をさらに明確にするとともに、その課題への対応施策について検討することとした。

3.1. 文献調査結果

まず、文献調査を通じて教育カリキュラムの違いや先行事例をみていくこととする。

3.1.1. 幼小連携の枠組み（「接続」と「連携」の違い）

2017年3月に幼児教育の三法令が改訂され、2020年には小学校学習指導要領も改訂されたが、その改訂のポイントの一つが「学校段階等間の接続」である。これは、幼児教育から小学校、そして中学校から高等学校へと一貫して資質・能力を育んでいくために、それぞれの接続を円滑にしようというものである。幼児期はその基礎を築く非常に大切な時期であり、小学校は幼児教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて、子どもが主体的に自己発揮できるような環境を整えていくことが求められる（田澤・吉永, 2020）。

木下（2019）は、幼児期から児童期にかけての段差や壁、溝を取り除き、幼児期と児童期を繋げ、なめらかに小学校生活をスタートできるようにすることが、幼保小の「連携・接続」である、と述べている。また、幼児教育にとって小学校への連携や接続はまさに重要課題であり、連携や接続の課題は、小学校教育においても最重要課題として位置づけられている、と指摘する。

「連携」とは、主に幼保小の園児と児童の交流活動が中心であり、「接続」は幼児教育のなかで育っている遊びの中にある「学びの芽生え」と「小学校の自覚的な学び」を理解し、教育課程に繋げていくことである。これまでの子ども同士の交流活動を中心とした「連携」から、教育課程で繋げる「接続」へと新しい方向性を示すことで、幼児教育と小学校教育の円滑な接続を推進しようとする新たな方向性が示された。しかし「連携」より「接続」を重視するというのではなく、両者どちらが欠けても前に進むことはできないため、実際に交流活動をし、そこから見えてきた子どもたちの育ちや学びを反映させた教育活動を行っていく、「連携」と「接続」をセットで考えることが重要である。さらに、教育課程を連続させるためには、子どもの育ちや学びの姿を連続させることに主眼を置き、そのうえで幼児期の学びが小学校に繋がる「連携」及び「接続」が重要である（木下, 2019）。

3.1.2. 「接続」の事例

「接続」の代表的な事例として、「アプローチカリキュラム」と「スタートカリキュラム」について述べる。

有嶋（2019）によれば、「アプローチカリキュラム」とは、幼児期における遊びの中の学びが、小学校の学習や生活に生きて働くことができるよう工夫された保育所、幼稚園年長児後半（5歳児9月～3月）のカリキュラムのことである。

小学校での学習活動を幼稚園で先取りして行うというものではなく、2017年3月の改訂により幼稚園教育要領及び保育所保育指針に示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）の方向性に近づけるよう工夫されたカリキュラムと言える。

この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）は以下のとおりである。

(1) 健康な心と体

幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

(2) 自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

(3) 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

(4) 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

(5) 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

(6) 思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いた

りし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

(7) 自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切に作る気持ちをもって関わるようになる。

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

(9) 言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

(10) 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

幼児期の教育は遊びや生活を中心として環境を通して行われるが、ただ遊んでいるのではなく、面白いことや楽しいことをしたり、何か発見したり疑問を持ったりする経験を繰り返しながら自分のやりたいことを選び、思う存分遊ぶことで様々なことを学んでいる。また、遊びの中の学びは「学びの芽生え」として集中力や自信、自己発揮、自己抑制、好奇心などの育ちが小学校以降での学習活動の基盤となる。

アプローチカリキュラムは、幼児期に見られる「学び」や「育ち」の姿が、小学校の先生にも分かりやすい形で提示されていることが必要である（木下，2019）。

一方、有嶋（2019）によれば、「スタートカリキュラム」とは、入学当初に幼児期の生活に近い活動と児童期の学び方を織り交ぜながら、幼児期の豊かな学びと育ちを踏まえて、児童が主体的に自己を発揮できるようにする場面を意図的につくるための小学校入学時のカリキュラムのこと」（p4）である。国立教育政策研究所（2015）は、スタートカリキュラムは「小学校に入学した子供が、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通した学びと育

ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラム」(p2)と定義している。

幼児教育は文字や数字の勉強ではなく、子どもたちの自発的な遊びを通した総合的な指導を中心としているが、小学校教育では教科書を使用し、学習活動が展開されることが中心である。そのためスタートカリキュラムでは幼児期に遊びや生活の中で育まれてきた「学び」や「育ち」を大切にしながら、小学校教育でさらに「資質・能力」を伸ばし、幼稚園と小学校が連携して「小1 プログラム」などの就学期の課題を少しでも解決できるように工夫することが大切である。また、幼児期の遊びや環境が活かされていることや、生活料が中心となるが、すべての教科で合科的に編成されることが必要である(木下, 2019)。

このスタートカリキュラムを積極的に行っている事例の1つに神奈川県横浜市がある。多様な環境で育ってきた子どもたちがスムーズに学校生活に適応し、教科等の学習に円滑に接続できるよう、横浜市では2011年度に『横浜版接続期カリキュラム 育ちと学びをつなぐ』を策定し、すべての市立小学校でスタートカリキュラムに取り組んでいる。『横浜版接続期カリキュラム平成29年度版』の中では、「横浜版スタートカリキュラムで育てたい子どもの姿」として

- ① 安心して自己を発揮し、やってみたいことに向かって頑張る子ども
- ② 新しい学級や学校のルールを受け入れ、学級の一員として協同的に活動できる子ども
- ③ 幼児期の学びを生かして、自己肯定感を高め、主体的に学習に取り組む子ども

と明確に示している(p45)。

また、「横浜版スタートカリキュラム」のねらいは

- ① 安心して学校生活をスタートし、集団の中で自己発揮できるようにします
- ② 学級の一員としての自覚をもって、協同的に活動することができるようになります
- ③ 幼児期に身に付けた力を発揮して、各教科等の学習に円滑に移行し、主体的に学ぶことができるようになります

と定めている(p45)。

横浜市には、2020年4月1日現在、245の私立幼稚園、39の認定こども園、38の市立保育所等がある。ほとんどの学校で複数の園から1年生が入学してくるため、子どもにとって新しい友人や教員と出会う学校生活の始まりは、期待もあれば不安もあるだろう。そこでスタートカリキュラムは、まず一人ひとりが安心して過ごせるように、新しい友人関係を築いたり居場所を作ったりするために必要な仕組みであると言える。

最後に、横浜市の取り組みにおける、具体的な学びの時間帯を紹介したい。具体的なスタートカリキュラムのねらいを達成するために横浜市では、次の3つの学びの時間帯で単元や学習活動を配列している(表2)。

表2 学びの時間帯〔「横浜版接続期カリキュラム平成29年度版」第5章より引用〕

なかよしタイム	一人ひとりが安心感をもち、担任や友達に慣れ、新しい人間関係を築いていく時間です。自分の居場所を学級の中に見出し、徐々に集団の一員としての所属意識をもち、学校生活の基盤である学級で、安心して自己発揮できるように工夫していきます。
わくわくタイム	幼児期に身に付けた力を発揮し、主体的な学びをつくっていく時間です。生活科を中心として、様々な教科等と合科・関連を図り、教科学習に円滑に移行していくための時間として位置付けています。幼児期における遊びを通した総合的な学びを生かし、子どもの思いや願いに沿った学習や、具体的な活動や体験をきっかけにして各教科等につなげる学習を大切にすることで、主体的に学ぶ意欲を高めます。
ぐんぐんタイム	わくわくタイムやなかよしタイム、日常の生活の中で子どもが示した興味や関心をきっかけに、教科等の学習へ徐々に移行し、教科等特有の学び方や見方・考え方を身に付けていく時間です。

3.1.3. 文献調査結果のまとめと見えた課題

小1 プробレムが社会的問題となり、小学校へ入学時の大きな段差につまずく子どもたちの様子が浮き彫りにされた。なぜ、幼稚園・保育園では主体的に生活し、活動していた子どもたちが落ち着かず、不安を抱え、本来の自分自身を発揮することができない状態が続いていくのだろうか。学校生活に適應できない子どもが増えているのだろうか。それには、学校生活と幼稚園生活の違いから生まれる段差が大きく関わっていると考えられる。

2017年及び2018年の小学校学習指導要領及び幼稚園教育指導要領の改訂時に、幼保小の接続を図っていくために「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が記された。卒園・入学を経て生活が変わっていく切り替え時期に幼稚園教員（保育者）と小学校の教員間で子どもの育ちを共通理解するために活用することを提言している。入学時の子どもはゼロではなく、幼稚園での育ちがあったことを理解し、その育ちを小学校の生活につなげ、伸ばしていくことが大切であり、それが段差を小さくするということである。入学後スムーズに学校生活を送っていくためには段差の小さな接続の部分が作られるよう考慮と工夫をしていくことが必要である。

現在の連携は幼稚園児・保育園児と小学校の児童が年に数回、一緒に遊ぶ、給食を食べる、製作をするなど様々な交流を行っていることが多く見られる。5年生と年長児、1年間幼稚園児と児童の組み合わせを固定するなど、実施方法には工夫が施されている。その時々の実施内容やねらいについて、反省時には様々な気づきの声が双方から出てくる。しかし、現実的にはこの活動のみではなかなか段差を小さくすることができない。年に数回の行事だけとなってしまうと、単発で終わり、お互いの生活の違いを理解し合わないままだと、学校と幼稚園・保育園の建物の距離と同じだけの心の距離が生まれてしまい、形だけのものとなっ

てしまう恐れがある。

そもそも、幼稚園・保育園と小学校、双方の生活には大きな違いがある。大きくは以下の2点があげられる。

- ・時間割で区切られている小学校と、時間の枠がゆったりと作られ、活動によっては時間の区切りを変更をしていく柔軟性がある一日を送る幼稚園・保育園
- ・教科書をもとに到達目標をはっきりさせながら学習をしていく小学校と、遊びの中から学びの基礎を育んでいく幼稚園・保育園

この違いは入学後に生活が一変するという状況を生む。

まずは、幼稚園教員・保育士と小学校の教員同士が、お互いの子どもの生活環境の違いを知ることが必要である。時間の区切りや生活の仕方（基本的な生活習慣）など具体的な部分、また好きなことや興味のあるもの等、環境や遊びを通して自ら学ぶ幼児期の生活と、教科書中心の小学校の生活などの違いを知ること、接続期の子どもの不安や戸惑いが分かるようになること、そして手立てが生まれてくることが期待できる。文字や数を教える、長時間座って話を聞く練習をするなど小学校の活動を前倒しすることが接続期と捉えてはならない。幼稚園教員・保育士と小学校教員が対等な立場でコミュニケーションをとり、よく理解し合うためにお互いの学校を訪れ、実際に一日の生活をクラスの中で過ごすなど、現場の生の園児・児童の様子を見ること、教師の対応の仕方を知ることでもある。

お互いの学校・園を理解しながら、共通認識をもって作成する接続期のカリキュラムが必要となってくる。年長児の後半から入学後1学期ぐらいまでの期間では、園では学びの基礎となる体験の計画、小学校では園の生活を取り入れ、徐々に学びの基礎から学びへ向かっていく生活時間や授業内容の工夫を計画していきたい。また、園では日常の子どもとの関わりの中で学びの観取りをしっかりと行い、遊びから学びを発展させていけるようにすることが必要である。つまり、園児一人ひとりの育ちや変化に気づき、小学校につなげていけるよう園の教育の質を上げていくことも同時に必要となってくる。

3.2. 聞き取り調査結果

次に、聞き取り調査等を通じて、実際の先進的な事例や実践のポイントなどをみていくこととする。

3.2.1. 横浜市の取り組み

【聞き取り調査の概要】

- ・実施日：2021年9月6日（月）
- ・場 所：オンラインにて実施
- ・聞き取り調査にご協力いただいた方：
神奈川県横浜市立恩田小学校 校長 寶來生志子様

【なだらかな接続に向けた取り組み】

横浜市では、幼児期の教育と小学校との円滑な接続及び双方の教育の充実を目指し、園と学校が協働で連携教育に関する研究と実践に取り組んでいる。横浜市立恩田小学校の実際の取り組み方法、効果、課題等を伺うことができた。

○「なだらかな接続に向けて」の取り組みについて

「なだらかな接続に向けて」の取り組みについては以下の内容である。

- ・園での育ちや学びを土台として始まる小学校での育ちと学びは、1年生がゼロからのスタートではないということを十分踏まえた繋がりという、ある意味小学校側の発想の転換が不可欠である。
- ・小学校と幼稚園の学びを行き来し、子どもが主体的に学んでいけることが大切である。
- ・スタートカリキュラムが義務化され、幼稚園と小学校を繋ぐためのよりどころとなる、「幼児期の終わりまでに育てたい姿」（10の姿）を小学校と共有していくことが大切であるが、小学校教員には未だ十分に周知されていない実情がある。

そのために、以下の内容を実践している。

- ・研修などで幼稚園の写真を見てもらい、その写真について「10の姿」を見つけ、肯定的な子ども観を共有する。
- ・お互いの保育（年長中心）や授業を観に行き、「10の姿」を皆で考える。幼稚園教員（保育者）は小学校の生活科を見る機会を作る。「10の姿」は小学校就学に向けての到達目標ではなく方向目標であり、幼稚園での環境の中で活かされるものである。
- ・子どもたちの中には環境が変わることで初めは自己発揮できない子どももいるため、そのような子どもの様子も伝えておくことが大切である。

○ 玩具等の工夫について

横浜市では地区で交流する幼稚園を決めている。また、補助金では紙や道具を購入するのではなく、幼小で共通の物（絵本やカプラなどの玩具）を購入し、幼稚園と小学校を繋げている。入学後は、始業の最初に幼稚園で親しんだ玩具で遊ぶ時間を取るようになるなどの工夫もある。

○ 幼小連携（交流）の実例について

子ども同士の交流は、園児が入学後1年生と6年生の関わりとなるよう、5歳と5年生の交流（5・5交流）をし、小学校で給食を食べる、ドッジボール、お店屋さんなどの活動を実践している。教員の交流については、小学校の夏休みに保育園（幼稚園）の保育参観を行い、10の姿（こんな姿が見えた、こんな力がついているなど）を付箋に書いて、皆で意見交換をする。また互いに授業参観できる機会を設けている。

【スタートカリキュラム】

「スタートカリキュラム」については3つのステージに分けられる。

- ・ 第一ステージ：幼児教育の重要性、小1 プロブレムの対策の一つとして
- ・ 第二ステージ：子どもたちの生活の流れを中心に置き、園生活を一部取り入れ、まず安心して登校できることを目指す
- ・ 第三ステージ：子どもたちの育ち、生き生きと学びに向かう力をベースに考える

導入前と導入後の変化と課題については以下の点がある。

- ・ 幼児教育の重要性を知り、小1 プロブレムの対策の一つとして、子どもたちの生活の流れを中心にする。
- ・ 今までは学校に子どもが合わせていたが、子どもの発達段階に学校が合わせ、自分を出していいという環境を作ることが大切である。しかし、学校が合わせても自分から進んで学ばなければ身につかない。小学校教員は「教える」ことに重きを置き、「自分で考える」ことを奪っていたのではないかと気づきがあった。「幼稚園ではどうしていたの?」、「幼稚園の頃は どう考えていたの?」と問いかけ、自分で考える機会を教員が奪わないことが重要となり、指導観の転換が必要である。
- ・ 小学校側（管理職）の意識が変わらないと、スタートカリキュラムが浸透しないため、学校全体で取り組む。
- ・ トラブルになった際の解決の仕方、すぐに自己発揮できない子、席を立ち歩く子への声掛けや対応方法などを引き継ぐことが大切である。
- ・ 相手（園児）のニーズも聞いて交流し、何のためにやるのか、今年の子は何が好きなのか、どうしたら笑顔になるかを考えることで、児童、幼児にとってお互いに恵みがある（「互恵性」）。

3.2.2. 日野市立日野第一小学校の取り組み

【聞き取り調査の概要】

- ・ 実施日：2021 年 9 月 27 日（月）
- ・ 場 所：東京都日野市立日野第一小学校
- ・ 聞き取り調査にご協力いただいた方：
東京都日野市立日野第一小学校 校長 石田恒久様

【幼保小の連携の概要】

日野市では幼保小の連携について、市内での統一はされておらず、各校に任されている部分が多い。そのため市内小学校校長、市内幼稚園・保育園園長、日野市教育委員会指導主事の数名で構成される幼保小連携教育推進委員会が、連携の在り方を各校にレクチャーして回る活動を行っている。

また地域ごとに近隣の小学校と幼稚園・保育園をブロックに分け、年間に数回、相互の授業や保育を参観する計画を立てているほか、協議会や情報共有などを通じ、円滑な進学の状態を整えている。

【スタートカリキュラムの内容】

日野市立日野第一小学校では、スタートカリキュラムの定着を図るため、1年生担任は、6年間ほど固定した人材を充てている。

その1年生を担当している教諭が2019年度に作成した算数科・生活科学習指導案によると、入学してすぐの4月上旬の時間割は「日野第一小学校スタートカリキュラム」として、のんびりタイム・ぐんぐんタイム・わくわくタイムの3つで構成されている（表3）。

この3つの時間の概要として、子どもたちが園などでの遊びや生活の経験を十分に発揮し、新しい学校生活を学級の皆で創り出していくことができるように、安心感・期待感・達成感を大切に生活になるように進めていること、また一日の流れをほぼ固定して、見通しをもって生活できるように工夫していることが記されている。

表3 のんびりタイム・ぐんぐんタイム・わくわくタイムのねらいなど【出典：「平成31年度

日野市幼保小連携教育推進委員会公開授業 第1学年 算数科+生活科学習指導案」(p1-2)】

＜ねらい＞		＜どのように・例＞	
園などでの朝の自由遊びに似た時間。自分のペースで1日をスタートする。	朝・1時間目	のんびりタイム	朝の支度が終わった児童から、お絵かき・本読み・ブロック・外遊びなどを自由に楽しむ。
新しい人間関係を築き、安心感ややる気を育てる時間。集団遊びをメインに行う。			皆で決めた遊びを行い、楽しむ時間。トラブルなどを皆で考え、学級の約束を作る。
児童の思いや願いを生かして活動を展開する時間。生活科が中心となるが、学習への期待感に応じて、教科を中心とした時間も行う。	2・3時間目	ぐんぐんタイム	みんなで約束を決めて、学校探検をしたり、校庭遊びをしたり、算数や国語などの教科の学習をしたりする。
1日の振り返り（達成感）や次の日への期待感を育む。	4時間目	わくわくタイム	楽しかったことや見付けたことなどについて子供たちがお話し、1日の活動を教師が認め、達成感を味わわせる時間。また、次の日の見通しをもたせ、期待感をもって下校できるようにする時間。

【入学前からの接続カリキュラム】

また、日野第一小学校では、「ゼロからのスタートではない」という観点からスタートカリキュラムを見直し、幼保小の連携をより密に深めながら、入学前からの接続カリキュラムを実践している。

ここで大切にしているのは、

- ①「小学校ってこんなことをするんだ！」という安心感と見通し
- ②「小学校って面白そう！」という期待感
- ③「勉強って面白い!」「やってみたらできた!」という達成感

2018年度には就学前の子どもたちが安心感・達成感・期待感をもって入学できるように、日野市立第三幼稚園、日野駅前かわせみ保育園との交流を3学期に行っていた。

「平成31年度 日野市幼保小連携教育推進委員会公開授業資料」によると、具体例として、
〔国語の単元〕

- ・口の体操（あいうえお体操）
- ・音読「ともだち」
- ・「ともだち」づくりあそび

〔算数の単元〕

- ・百玉そろばん数えあそび
- ・リズム数あてゲーム

〔生活科〕

- ・1年生下校用意→園児ランドセル体験

交流を終えた園児の感想としては、

- ・お勉強って楽しかった。
- ・早く小学校に行きたい。
- ・ランドセルは思ったよりも重かった。でも頑張りたい。
- ・百玉そろばんが面白かった。

その他、園児の保護者からは、

- ・小学校の先生の話聞いて動けたことが安心した。
- ・小学校に行って楽しかったと子どもがたくさん話をしてくれた。

等の声があったとされている。

【幼小接続の課題】

幼小接続の課題として、

- ① 小学校教員が幼稚園、保育園の園生活の実態、様子を理解することが必要であること
- ② 1年生のスタート時の姿（イメージ）について、教員間での差があり、「こうあるべき」という固定概念の強い教員もいる中、ある程度、学年担当者の自由さのある活動が認められるかどうかは、管理職の姿勢によるところが大きいこと

- ③ 担当教員のモチベーションを上げていくため、また充実した効果的なスタートカリキュラムの実現のためには、管理職のサポートが必須となること

の3点が挙げられた。

また、連携の留意点としては、

- ① 活動のねらいが、幼保、小学校の双方になければならないこと
② 子ども本来の発想力が乏しくなり、スケールの小さな交流になってしまうことを防ぐため、交流の中できまりを決め過ぎないこと

の2点が挙げられた。

3.2.3. 玉川学園小学校の取り組み

【聞き取り調査の概要】

- ・実施日：2021年10月18日（月）
- ・場 所：学校法人玉川学園
- ・聞き取り調査にご協力いただいた方：
学校法人玉川学園 学園教学部 学園教学部長 後藤健様
学校法人玉川学園 学園教学部 学園教学部事務部長 片野徹様

【一貫教育の仕組み】

玉川学園は、2006年にK12（一貫教育プログラム）をスタートさせている。幼稚園から12年生（学校教育法では高校3年生）までの教育を連続性のあるものに行っている。それまでは、幼稚園・小学校・中学部・高等学部それぞれの学校独自の文化・スタイルを持ち単独での運営をしていた。それぞれの学校の教育スタイルに関心を持ち、その学校を目指す入学者が多かった。

子どもたちの成長は1年、また通っている学校の6年、3年で途切れるものではなく、連続しているものだという考えのもとK12という仕組みを進めていった。これまでの学校の枠を外し、4年ずつでの区切りと呼び方、そして使う校舎も変えている。小学校・中学校・高校の校舎はあるが4年ごとの区切りで一緒に生活し、接続の部分としている。

- ① 幼稚園
- ② 1年生～4年生（小学校4年生）
- ③ 5年生～8年生（小学校5年生～中学2年生）
- ④ 9年生～12年生（中学校3年生～高校3年生）

※ 5・6年生と7・8年生、9年生と10・11年生が一緒に校舎を使うようにし、授業・活動などつながるようにしている。

それぞれの学校に進学する時の内部入試をなくし、入学金は幼稚園の入園時のみである。ただし、進学時の学力面は確保するため、学年の到達目標を決めている。実際には留年することはないが、到達しない場合は進級できないとしている。また、次の学校に進学していく

ときに自分の興味・関心・能力に合わせ選択できるコースも設定している。幼稚園年長児はバイリンガルクラスと日本語クラスの2コース、6年生はIBプログラムと日本の学校のプログラムの2コースから選択することが可能となっている。

2021年からは、

- ① Primary Division（幼稚部）
- ② Primary Division（小学校1年生～5年生）
- ③ Secondary Division（小学校6年生～高校3年生）
- ④ IB Programs Division（小学校6年生～高校3年生）

と新しいDivision構成の一貫教育体制へと移行している。

【幼稚園と小学校の連携の現状】

校舎・園舎が隣接した立地となっている。柵は設けているものの基本的にオープンにしており、小学生が園に行き園児と遊んだり、園児が校庭に遊びに行き小学生の遊具ボルダリングで遊んだりと自然な交流をしている。

年長組の2学期以降チャレンジプログラムとして小学校への接続を意識した活動を採用入れている。基本的に「遊びから学ぶ」というスタンスをおいた活動となっている。興味や関心に基づいて幼稚園教員（保育者）が子どもの様子を観取りながら毎日の活動を行い、主体的に関わる経験や学びに向かう「学びの基礎」を育んでいる。

小学校においては、1、2年生は専科の授業はあるが、総合学習の時間割は白抜きになっている。教師が児童の興味や関心に基づいて、また自主的、総合的に学びを進めていけるように配慮している。

幼小の接続の部分においてのカリキュラムは作らず、その時々で幼稚園と小学校の先生が打ち合わせをして実施している。小学校のクラス編成でも工夫を凝らしている。月齢でのクラス分けで4クラスとしている。4月～6月、7月～9月、10月～12月、1月～3月生まれで一年間を過ごす。入学後1週間後には通常の6時間授業をはじめめるのだが、内部進学の子どもたちが外部からの入学者をリードしクラスを作っていく風土が土台となり、小学校生活に慣れていくようにしている。

【教員の異動等】

連携を進めるためにお互いの学校文化の違いを理解し、幼稚園と小学校を始め、各学校の接続を推進していくためには人員の異動が必要であり効果的である。幼稚園に小学校教員が在籍し、園児に数や文字の指導を行う、逆に小学校に幼稚園の先生が行って授業を行う。また小学校から中学校、高校から中学校と学校間の教員の異動や連携が行われている。元の学校に戻った時に様々なフィードバックがなされ、教員間・学校間の接続に役立つ点が見られる。時には小学校から高校までそのまま持ち上がっていくケースもあるそうだ。幼稚園、小学校、中学・高校と複数の学校の免許を有した教員がいることが学校間の移動を可能にして

いる。また、これが教員採用の条件の一つとなっている。

玉川学園では縦軸と横軸の教員の関係、組織があり、幼稚園から大学までの一貫教育を実現している。自分たちの学校だけを考えるのではなく、常に他の学校を意識し、教育、設備・用具、生徒間などがつながっていくことで実現している。所属学校は違って、また異動があっても教育理念が統一されていることがさらに一貫の核となっていると考えられる。また、幼稚園から大学まで進学していく子どもたちがほとんどであるということは玉川学園の一貫教育・統一性を物語っているのではないと思われる。春に行う運動会は幼稚園から大学まで一堂に会して行われるが、年上が年下の世話をし、ともに育つ機会、触れ合う機会となっている。保護者も参観をし、一体となり、玉川理念を肌で感じる玉川ファンを増やす機会となっている。

3.2.4. その他調査結果

(1) 研修会「幼保小連携教育とスタートカリキュラムー幼児期から児童期前半までの育ちを踏まえてー」から

【研修会の概要】

- ・ 研修会名：「幼保小連携教育とスタートカリキュラムー幼児期から児童期前半までの育ちを踏まえてー」
- ・ 主 催 者：明星小学校・明星幼稚園
- ・ 実 施 日：2021 年 6 月 30 日（水）
- ・ 場 所：学校法人明星学苑府中校
- ・ 講 師：明星大学 教育学部 教授 齋藤政子様

【幼保小連携教育が導入されるに至った背景】

○ 就学前の保護者の期待と不安

教育期待がはじめから高い層への保護者アンケートによると、幼児教育と小学校教育の接続期に対して小学校生活に適應できるかという不安を持っていることが見て取れる。具体的には話をしっかり聞けるのか、身の回りのことが一人でできるのか、ひらがなを書けないけれど大丈夫か、などということが挙げられている。2000 年代以降、入学後学校生活に適應できず教室から飛び出すなどする期間がずっと続いていく状態「小1 プロブレム」や「学級崩壊」が社会問題として脚光を浴びたことも不安を増している原因の一つである。

「小1 プロブレム」以降、接続期の重要性が叫ばれ始め、2017 年・2018 年の学習指導要領・幼稚園教育要領の改訂版及び保育所保育指針には接続期の記述が加えられた。保育者・教育者の連携が不足し、互いの教育活動が理解し合っていないなどの問題があげられ「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を保育者と教育者で共通理解として幼小の接続をしていくことが盛り込まれた。

【幼保小連携教育の現状・方向性・課題】

全国的にみれば、接続期のカリキュラム作りに着手している地域もあるが、当学苑における幼小連携の現状は、年に数回の小学生と園児のふれあい活動にとどまっている。今後、幼児期の特性・過ごしてきた園生活を小学校教員が把握し、入学後の生活を考えつなげていくことが必要である。

そもそも幼児期の教育は環境を通して行うものである。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、今までの5領域と全く関係がないわけではなく、健康・人間関係・環境・言葉・表現の領域と関連しており、以下のねらいは引き続き重要である。

- ① 幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活を展開（幼児は安定した情緒のもとで自己発揮することにより発達に必要な体験を得ていく）
- ② 遊びを通しての指導を中心としてねらいが総合的に達成されるようにする。
- ③ 一人ひとりの発達の特性に応じる。

小学校の教科中心の生活とは大きく異なること、園生活で能動的に生活してきたことを活かしていけるような生活が必要である。ただし、小学校教育の前倒しや、小学校の準備として教科活動に励むのではないということを念頭に連携教育を考えていきたい。園生活は小学校での学びにつながる基礎を育んでいくものである。

そのために、アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムを作成することで「接続」を目に見えるようにし、なだらかに接続していくことが必要である。

【幼保小連携教育とは何か】

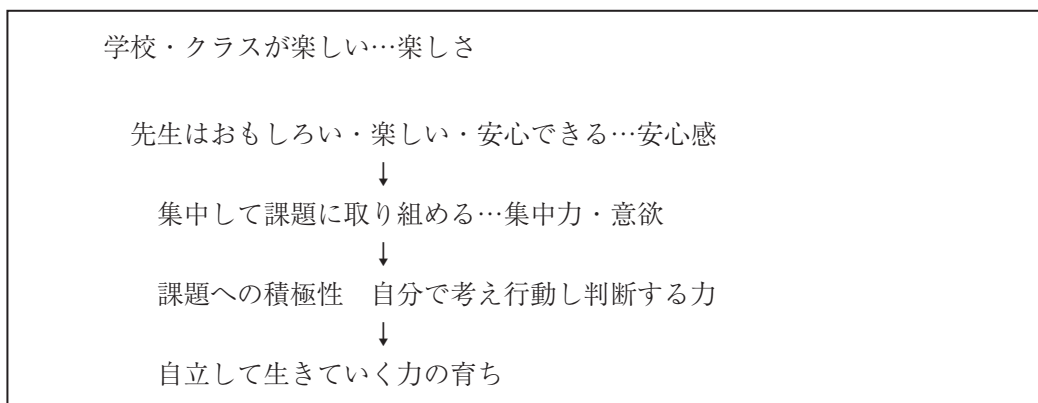
「接続」と「交流」と「連携」、三つとも幼保小連携教育の内容であるが、教育学的な観点から言えば、以下の3点の意味がある。

- ① 地域教育としての意味—保育・教育機関や地域の大人が連携し合うことにその地域に住む子ども達をどう育てていくかについて考える場
- ② 社会と出会う場としての意味—子ども達の生活の中に「文化」や「暮らし」を育てる場
- ③ 社会を形成する力を育てる場としての意味—異年齢交流、異文化交流、異世代交流の中で、差異を理解しつつ体験や感動を共有し、相手の立場にたって物事を考え、協同・協働しようとする人間性の基本を育てる場

【幼保小連携教育とスタートカリキュラムの実践】

スタートカリキュラムを作成し入学後から数か月なだらかに小学校生活に移行していく実践例は以下のとおりである。

- ・スタートカリキュラムで育つもの



- ・スタートカリキュラムを作成するうえで実際に採り入れていること

- ・時間の枠を小学校の時間割ではなく、幼稚園の生活の時間に近づけて過ごす。
自由な遊び（幼稚園・保育園で親しんだおもちゃ）・主体的な活動・ごっこ遊びなどを採り入れている。
- ・新しい人間関係を築き安心感をもつためにみんなでゲームをしたり、自分たちで係や当番を決めて取り組む。

【まとめとして・・・スタートカリキュラム実践のポイント】

- ① 「児童の観察・把握」を行いながら「園生活とのつながり」を活かす
- ② 園で学んだことを活かしながら、「小学生としての自覚」を引き出す
- ③ 「遊び心」と「安心感」のある生活を作る
- ④ 児童の実態・発達を踏まえて「柔軟性」のあるカリキュラムに ～合科的・関連的指導と「発問や指導のわかりやすさ」
- ⑤ 自分たちで学級をつくっていこうと思えるように、できることを認め、励まし、達成感や充実感をもてるようにする
- ⑥ 担任との信頼関係を構築しつつ、仲間の中で承認され理解されるようにする
- ⑦ 教師の発問や指導と環境構成を工夫する ～リズムとアクセントと「遊び心」

(2) 研修会「「幼小接続」の目的を問う 和光学園世田谷キャンパスの取り組みを例にして」から

【研修会の概要】

- ・ 研修会名：「「幼小接続」の目的を問う 和光学園世田谷キャンパスの取り組みを例にして」
- ・ 主 催 者：和光大学 名誉教授 太田素子様
- ・ 実 施 日：2021 年 8 月 9 日（月）
- ・ 場 所：オンラインにて実施
- ・ 講 師：名古屋芸術大学 人間発達学部 准教授
(前 和光学園和光小学校・幼稚園 校園長)：鎌倉博様

【幼保小連携事例等】

文科省・厚労省「幼保小連携事例」は以下の点である。

- ① 子ども同士の交流…小学生が園児を招待、小学生と園児の活動など
- ② 教職員の交流…相互参観・体験、合同情報交換会、懇親会、研修会など
- ③ 教育課程の工夫…園での生活や幼児教育、保育内容と方法を活かす

また「幼小接続」については小学校就学が円滑になることばかりに焦点が当てられている「アプローチカリキュラム」が多い。小1スタートプログラムについては「ゴールデンウィーク前までに学校生活に移行できるように、年長児後半は意識的に話を聞けるように」という考えがあるが、実際は期限で切れるものではない。年長児の後半には意識的に話を聞く、約束を守る、集団を意識して生活するなど、年長組の後半から小学校を意識した活動が盛り込まれていることが多い。

【和光学園の取り組み】

和光小学校への内部進学者のスムーズな接続を目指して連携を進め、幼小一体のキャンパスを目指した取り組みについては以下の点である。

- ① 小学校の授業を見る会を実施する
- ② 小学校で行っていることを幼稚園の教育に取り入れる
- ③ 年長組の小学校探検を受け入れる
- ④ 小学校が幼稚園児を招待する

具体的な実践内容についての詳細は以下のとおりである。

- ・ 子ども同士の日常的な交流を行う。
- ・ お互いの施設（プール、調子室、図書室）を有効活用する。
- ・ 校舎の改築を行い、校舎と園舎を一体化し、行き来しやすい環境にすることで、幼小のお互いの様子がどこからでも見えるようにする。

- ・校園長という校長と園長を兼ねる形をとることで、幼小の良さを理解しやすくなり、子ども同士の日常の交流やお互いの施設の有効利用がみられるようにする。

上記にもかかわらず、依然として小学校教員の厚い壁があったため、可能な行事、研究会の共同開催の実現へ向け合同行事を開催し、「絵画作品展」（幼小の作品を一緒に並べる）、日曜授業公開を同日に行い、相互参観などを実践した。今では教職員の交流として、春夏の合同研修会、幼小共通に関わる課題での合同職員会議の実施、小学校養護教諭の幼稚園での緊急対応などが実践されている。

【その他】

互いの教育活動を理解し合い、それぞれの時期の子どもたちにふさわしい活動として活かす努力を続けていくために、互いの財産を活かし合う柔軟性・ゆとりが必要である。

3.2.5. 聞き取り調査のまとめと見えた課題

上述のとおり、聞き取りや研修からも調査を行った。幼小の接続の取り組みや実施方法をまとめるとともに、課題について述べる。

最近幼稚園や保育園と小学校の接続について施策を講じている自治体や学校・園が多い。ただ、接続や連携など幅広く取り組んでいるところ、また連携にとどまっているところなどその内容は様々である。「接続」は、小学校1年生はゼロからのスタートではない、これまでの幼稚園での育ちを踏まえて小学校へつなげていく、小学校側はこれまでの育ちを踏まえて時間割りや生活を考え緩やかに移行していく、という考え方が主流となっているようだ。これも、接続のカリキュラムまで作成しているところから、普段の幼稚園教員（保育者）と小学校教員の話し合いのみにとどまっているところまで多様である。「連携」に関しては、幼稚園児と小学校児童がともに遊んだり、ともに行事を行ったりなど、一緒に取り組める活動から触れ合いを実践している。

特にここでは、あらためて「接続」に焦点を当ててまとめと見えた課題について述べることにする。「接続」の取り組みとしては、前で述べたように幼稚園、小学校それぞれでカリキュラムを作成し、「接続」させて、その接続部分をなだらかにしている。幼稚園側のカリキュラムは、学びの基礎となるように生活や活動のなかの育ちを意識して働きかけることや、環境を作っていくことを大切にしている。小学校側のカリキュラムは、幼稚園での生活に近い15分単位の時間割や白抜きの時間割で合科的な活動を中心にしたり、小学校生活が安心して送れるように居場所を作れるような遊びやゲームをクラスで行う時間を設けたり、幼稚園時代のおもちゃや絵本を採り入れるなどの工夫を施している。枠にはめるのではなく子どもたち主体で学校側が合わせるようにしている、と言えよう。この双方のカリキュラムによって、次第に学びへと向かい接続の勾配がなだらかなるように配慮している。

これに伴い、幼稚園教員（保育者）と小学校教員の間で行われている交流では、お互いの学校・園の文化の違いを知り、授業や保育を体験してみるなど、幼小合同の職員会議や合同

研修を行うところもある。なかには、園での様子を理解してもらうために園児の生活の写真を見て「幼児期の終わりまでに育てたい姿」を探してもらう研修をし、子ども観を共有する試みをする自治体もあった。また、環境が変わることで不安になり、自己発揮できない子どもの様子や対応の仕方を事前に小学校に伝えておくことも大切だと指摘する専門家もいた。さらには、幼稚園と小学校間での教員の異動を実現し、幼稚園教員（保育者）及び小学校教員の意識を変えることで、接続を実現している学校もあった。

このようななかでも、現在の接続においては数多くの課題が残されているのが実情である。第一に、小学校教員間での1年生のイメージに差があることが挙げられる。小学校教員がこうあるべきという姿に合わせて、園で保育をしてほしいと感じている教員も多い。第二に、お互いの学校・園の違いを知り、意識・指導観を変えることが必要である。そのためには、双方の教員が相手方の保育体験、学校体験をし、緊密にコミュニケーションをとりあうことが必要である。第三に、幼小間での生活時間の違いや物理的な距離によりコミュニケーションをとる機会が限られてしまう、という点である。第四に、幼小での連携計画での決めごとが多くなった結果として、それが形式的な活動となってしまう危険性がある、ということである。それぞれの学校・園は活動のねらいを持つことが必要であり、お互いのニーズを考慮し互惠性を深めた活動を計画したい。最後に、接続を進めていくにはこれまでの学年だけの横のつながりだけではなく、幼小を跨いだ管理職を含む縦のつながりがより一層必要となる。

根本的には、上記に挙げたように小学校と幼稚園の教育の違いを理解し合うこと、そして子ども観の共有が最も本質的な課題になろう。接続を進め、なだらかな接続を形作っていくためには、一番欠かせない根底の部分であり、今後取り組むべき最も重要な課題である。

4. 研究のまとめ

4.1. 「連携」と「接続」のあり方

今回の研究の結果、幼稚園で培われた学びと育ちを小学校教育に円滑に接続していくことが明記されるなど、幼小の「連携」と「接続」の取り組みが重要視され、より一層求められていることが分かった。

筆者らが所属する明星幼稚園は、幼稚園と小学校が隣接した総合学園であるため、子ども同士の交流活動や教員同士の交流や研究等がより実践しやすい環境にある。今までも幼小の合同活動においての子ども同士の交流や、小学校教員による年長児への連携活動、教員同士の合同研修が定期的に行われてきた。

今回の研究結果を踏まえると、「なだらかな接続」を実現していくために、教員間の交流の機会を定期的 to 実施し、意見交換の場を増やしたり、互いの保育や授業を参観し、活動の様子や子どもたちの姿を知る「相互理解」の場を年間を通して行ったりすることが求められる。

これまで実施してきた取り組みをもとに、「連携」と「接続」を意識した年間指導計画を立て、より効果的な学びと育ちの接続となるよう取り組んでいきたい。

4.2. 2021 年度に試行する明星幼稚園の「連携」

今回の研究を踏まえ、連携とは園児と児童との交流の場が中心であるが、その場限りの活動で終わらせるのではなく、子どもたちの発達段階や教育課程を相互に理解し、園児にとっても児童にとっても学びある活動となるよう協働的な関わりが大事であると理解できた。

明星幼稚園でも、園児が学苑内散歩のなかで小学校を訪れ校庭で遊ぶ機会や、小学生が幼稚園に来園し、一緒に焼き芋会食などの交流の場を設けている（写真1）。しかし単発のイベントや活動となりやすく、年間で同じ学年との交流の場は継続して行うことができていないため一過性のものとなりがちである。

今後、「なだらかな接続」を実現するため、筆者らが考える子どもと教員の連携のポイントとして以下が挙げられる。



写真1 明星幼稚園の園児と明星小学校の児童の交流（「にこにこの日」）の様子

【幼小合同研修会】

現在、年間2回程度、幼稚園と小学校の教員が一堂に会する研修会を行っている。各回の前半は、幼稚園の教員が卒園した子どもたちの授業参観をする。幼稚園での保育の成果が小学校の学びの中でどれくらい見られるのか、また小学校6学年の発達段階はどのようなものかということを、直接見る有意義な機会となっている。後半は、様々なテーマでのディスカッションを行うが、幼小双方の立場からの意見を交わしながら、接続のあり方、育てていきたい子ども像などを共有し、一貫性を高める会としている。

【教員同士の相互理解期間の設定】

今回の研究を受けて、あらたに実施する予定の連携活動となる。幼稚園から小学校へ、小学校から幼稚園への教員の「相互理解教育期間」を設定し、数日間、一日、午前中など年間を通じて互いの教育を実際に見合うことができる機会を設定したい。これにより教育の相互理解が期待でき、それぞれの教員が体験を通して得た学びを教育現場に持ち帰り、幼小接続の視点で指導にあたることが可能になると期待できる。また子どもたちの発達段階（学年・月齢等）による特性や個々の指導者の働きかけを知ることも大きなねらいとなる。

【長期的な実践交流の場の設定】

これもあらたに実施する予定のものとなる。1回の交流活動で終わってしまうのではなく、就学後も続いていく関わり合いを意識した5歳児と5年生との交流(5・5交流)などを設定し、活動内容やねらいを教員同士で意見交換を出し合う場を持つ。また、交流活動を行う際は事前打ち合わせ・事後反省会を実施する。反省会を行うことで、成果と改善点を振り返り、次のよりよい活動へとつなげていくねらいとなる。

4.3. 2021 年度に試行する明星幼稚園の「接続」(「明星幼稚園版アプローチカリキュラム」)

4.3.1. 幼小接続の方針 (幼稚園)

幼稚園教育と小学校教育をなだらかに接続していくためには、アプローチカリキュラム及びスタートカリキュラムの作成が必須であることが今回の研究の結果明らかになった。そこで筆者らが所属する明星幼稚園でも、本研究の成果を踏まえた「アプローチカリキュラム」を図1及び図2のとおり策定した。年長の9月からを接続期と捉えたものであり、図2は2021年度3学期から施行するカリキュラムである。

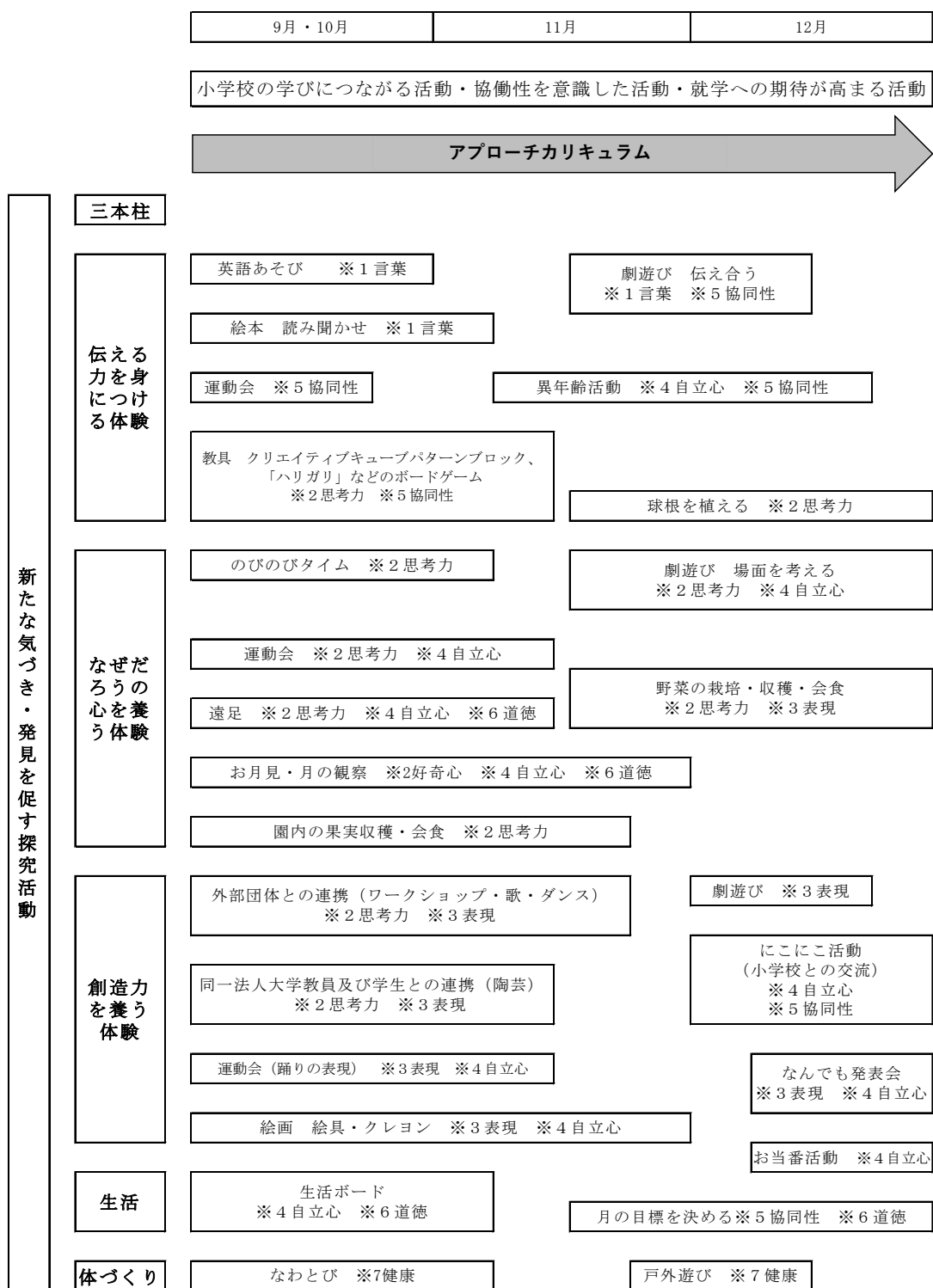


図1 明星幼稚園「アプローチカリキュラム」（年長9月～12月）

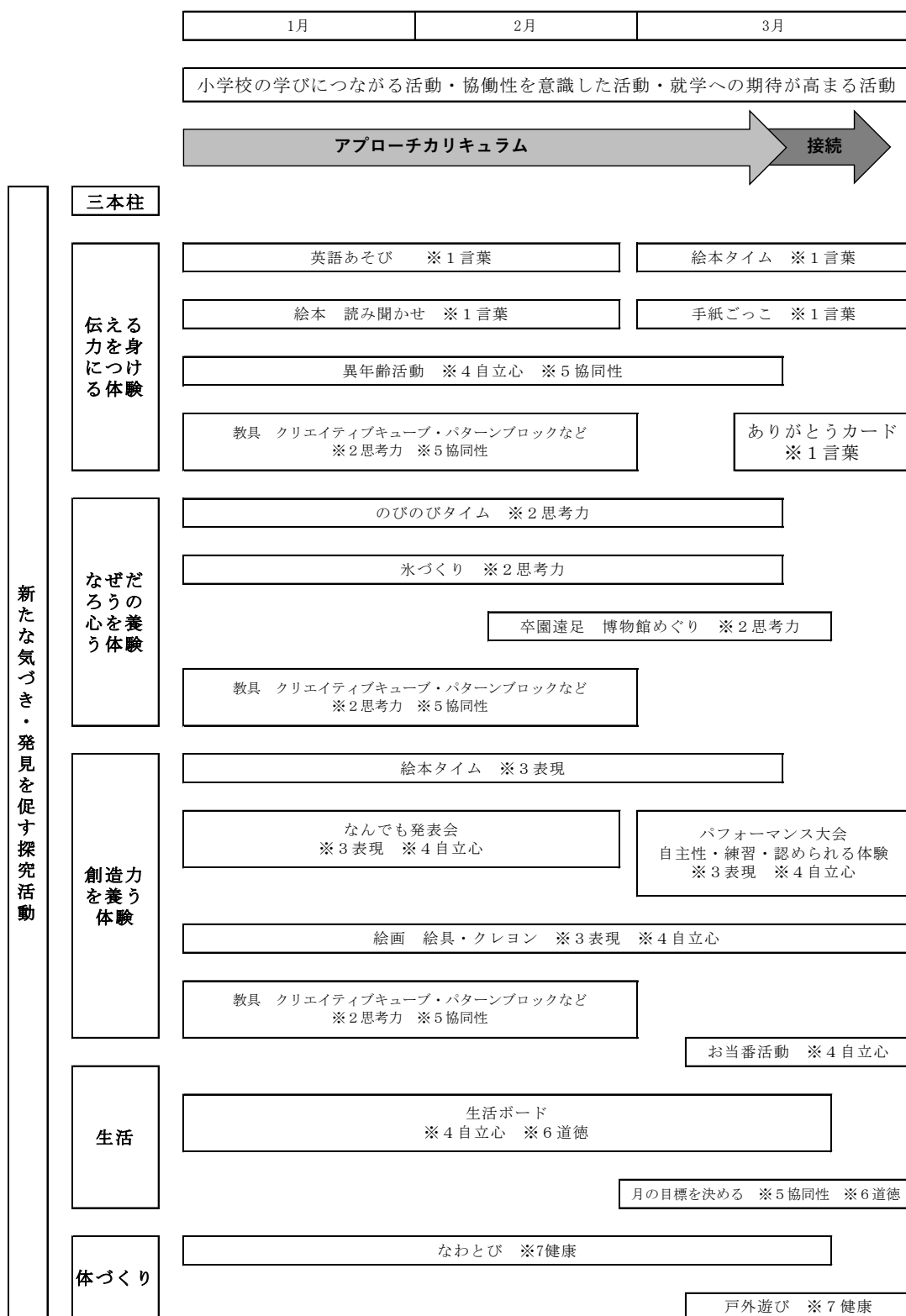


図2 明星幼稚園「アプローチカリキュラム」(年長1月～3月)

縦軸は本園の各活動の基本となる「新たな気づき・発見を促す探究活動」を記し、それを「伝える力を身につける体験」、「なぜだろうの心を養う体験」、「創造力を養う体験」に区分したうえで、活動とそのなかで身につけることが期待される力を記載した（このカリキュラム体系は2023年度より本格実施する予定であるが、「アプローチカリキュラム」は2021年度より先行実施する予定としている）。上部には、「小学校の学びにつながる活動」「協働性を意識した活動」「就学への期待が高まる活動」と記載し、小学校の「スタートカリキュラム」につながる活動であることを明記した。

なお、それぞれの活動で身につけることが期待される力を以下のとおり付記している。

※1 言葉…言葉・伝え合う・文字への興味・コミュニケーション力

※2 思考力…思考力・好奇心・知識・探究心・発見力・考察力・発想力・数量の理解

※3 表現…表現力・想像力・感性・自己表現力・創造力・巧緻性

※4 自立心…自主性・やり遂げる力・推進力・達成感・責任感・先を見通す力・自己発揮・自己肯定感…年長児の自覚・就学への期待

※5 協同性…協調性・協働性・思いやりの心・異年齢との関り方

※6 道徳…道徳・規範意識の芽生え

※7 健康…健康な体づくり

すべての活動は、小学校の学びの基礎となる要素が含まれているものであり、また教科的に分かれるのではなく、遊びや活動から学びの基礎を育んでいくものという認識から三本柱の間には境界線が設けられていない。個々の活動がいくつもの学びにつながる成長を内在させており、活動間でも重なり合う部分が存在しながら最終的にすべての活動が小学校へとつながっていくという考え方である。特に年長の2学期からはすべての活動・行事が「アプローチカリキュラム」となっていくものと認識している。これらの考え方は、本研究から筆者らが学び、再認識したものである。

4.3.2. 幼小接続の施策（幼稚園）

前述のとおり、本研究を通じて、今まで行ってきた活動・行事から育てる目標の重要性を再認識するとともに、本研究の成果から採り入れることが必要と思われることの検討も実施した。例えば、外部団体との連携で、かさ袋ロケットを作り、月や星について調べるなどの活動を通して、宇宙をテーマに興味・探究心・好奇心へとつなげる活動も実施しているところである。2021年12月の遠足ではプラネタリアムへ行き、2022年度は東京都台東区にある博物館めぐりなど、知的好奇心・発見力・探究心など育んでいけるように取り組んでいく。これらは、小学校の学びにつなげる体系的から発案し、実施しているものとなる（写真2）。



写真2 明星幼稚園における宇宙をテーマにしたあらたな活動

また、小学校の図工教員や外部の専門家に協力を仰ぎながら、陶芸を3学年通して体系化して取り組むことも検討している。小学校教員のみにとどまらず同一法人内にある大学の教員及び学生等による指導等を受けながら、本物に触れ、自分で作る楽しさや達成感、表現力、そして自己肯定感を得られることを意図している。

さらに、普段の活動に関しては、例えば、年長クラスは「のびのびタイム」（本園と同一法人内にある明星小学校の教員による、言葉や思考などを育む活動）で鉛筆へ親しみ、鉛筆の使い方を教わることで文字への興味や就学への期待をもたせる活動を実施している（写真3）。



写真3 明星小学校の教員による年長クラスの活動（「のびのびタイム」）の様子

これに「接続」の発想をさらに取り込み、2021年度3学期には郵便屋さんごっこで、文字を書いて手紙にし、園児たちが自分たちで運営する郵便屋さんが集配・配達をすることで、就学後に求められる自主性・協働性を育むことを計画している。2021年度末には、両親に向けた感謝の手紙を自分の文字で書くことにも挑戦させ、文字をツールとしてコミュニケーションをとり、心が通じ合うという経験から、文字の楽しさや面白さを知ることによって学びにつなげていくことも計画している。

4.4. 2021年度に試行する明星小学校の「接続」（「明星小学校版スタートカリキュラム」）

4.4.1. 幼小接続の方針（小学校）

（1）幼稚園教育要領、小学校学習指導要領の改訂趣旨

幼小接続の今後を考える際に、双方の教育及び指導要領のねらいを確認する必要がある。

2017年の幼稚園教育要領改定のポイントは、環境を通して行う教育という従来の基本は変えずに、育みたい資質・能力の三つの柱を整理した点である。①知識・技能の基礎、②思考力・判断力・表現力等の基礎、③学びに向かう力・人間性等である。これを踏まえ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を明確にしている。

一方、2019年の小学校学習指導要領改定のポイントも、育成を目指す三つの柱ということで、①知識及び技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力・人間性等としている。

双方共通した改定趣旨を持ち、新たな教育がすでに進められているが、兎にも角にも今回の改定は、これまでの改訂同様に時代を見据えた改訂であるということは言うまでもない。

今回の改定に際して、よく聞かれたワードとして「社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難」というものがある。学校教育には、子どもたちが様々な変化に積極的に向かい、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。

(2) 就学後の留意点

(ア) 就学前（園生活）の理解

例えば、就学前の集団生活の場では、約束事をストレートに伝えても、なぜそうしなければならないのかが理解できなければ、子どもたちは実行に移しにくいことも多い。そのような場合、教員（保育者）は、「どうしたらいい?」、「どんな気持ちかな?」と、子どもに投げかけ、考えさせる場面を意図的に作っている。感情や思考を育てる上で、必要かつ大切な営みである。

言うまでもないが、小学校教育はそれまでの幼稚園や保育園で育まれた力が土台となっている。園での自由な遊びの中で試行錯誤し、友達との関わりや規範性の素地を学んできている。また、栽培や飼育体験では、生命を慈しみ、自然の現象に感動してきた。そのような一つひとつの経験や体験が、生きる力を支える土台となっている。

小学校教員が幼保教育の実態を、直に目にする機会がどれほどあるかと言えば、決して多くはないと推察される。しかし、それを知ろうとし、教育のねらいを理解しようとしなければ、効果的な接続を望むことはできない。

幼保の教員が子どもたちに対してどのように思考を促しているのか、またどのような言葉がけで子どもたちの主体性を伸ばしているのかなど、就学後の指導に活かすことのできる点は大いにある。行き来の可能な園ならば、就学前後で積極的に足を運び、指導の参考にするべきである。子どもたちが培ってきた学びを発揮できる環境づくりを心がけたい。

(イ) スタートカリキュラムの策定

子どもたちにとって就学直後の生活を安心で、楽しいと思えるものにするためには、幼保

のアプローチカリキュラムと合わせて、小学校でのスタートカリキュラムの実施が効果的と考えられる。公私問わず、具体的なカリキュラムの策定については、各自治体や学校法人に任されている場合が多く、組織的な取り組みができていた小学校も多くはないはずである。カリキュラムがあることで、組織としての取り組みが活性化され、行き来のしやすい幼稚園や保育園であれば、アプローチカリキュラムとの接続も視野に入れながら、それぞれの教育に落とし込むことができる。

今後、明星小学校では、本研究の結果を踏まえ、明星幼稚園とカリキュラムの接続を行い、年長と小学校1年生の就学前後の部分の接続を重なり合わせ、教育に柔軟性を持たせていくこととしている。

主な項目としては、「柔軟性のある時間設定」、「弾力的な生活」、「遊びを学びへつなげる」である。それぞれの施策については後述するが、小学校が楽しくて安全な場所であることを、子どもたちの実態に合わせて整えていきたいと考えている。

そこで、本研究の成果を踏まえた「スタートカリキュラム」を図3のとおり策定した。策定にあたっては図1、図2の明星幼稚園の各活動とのつながりを意識している。なお、それぞれの活動で身につけることが期待される力は図1及び図2と同様である。

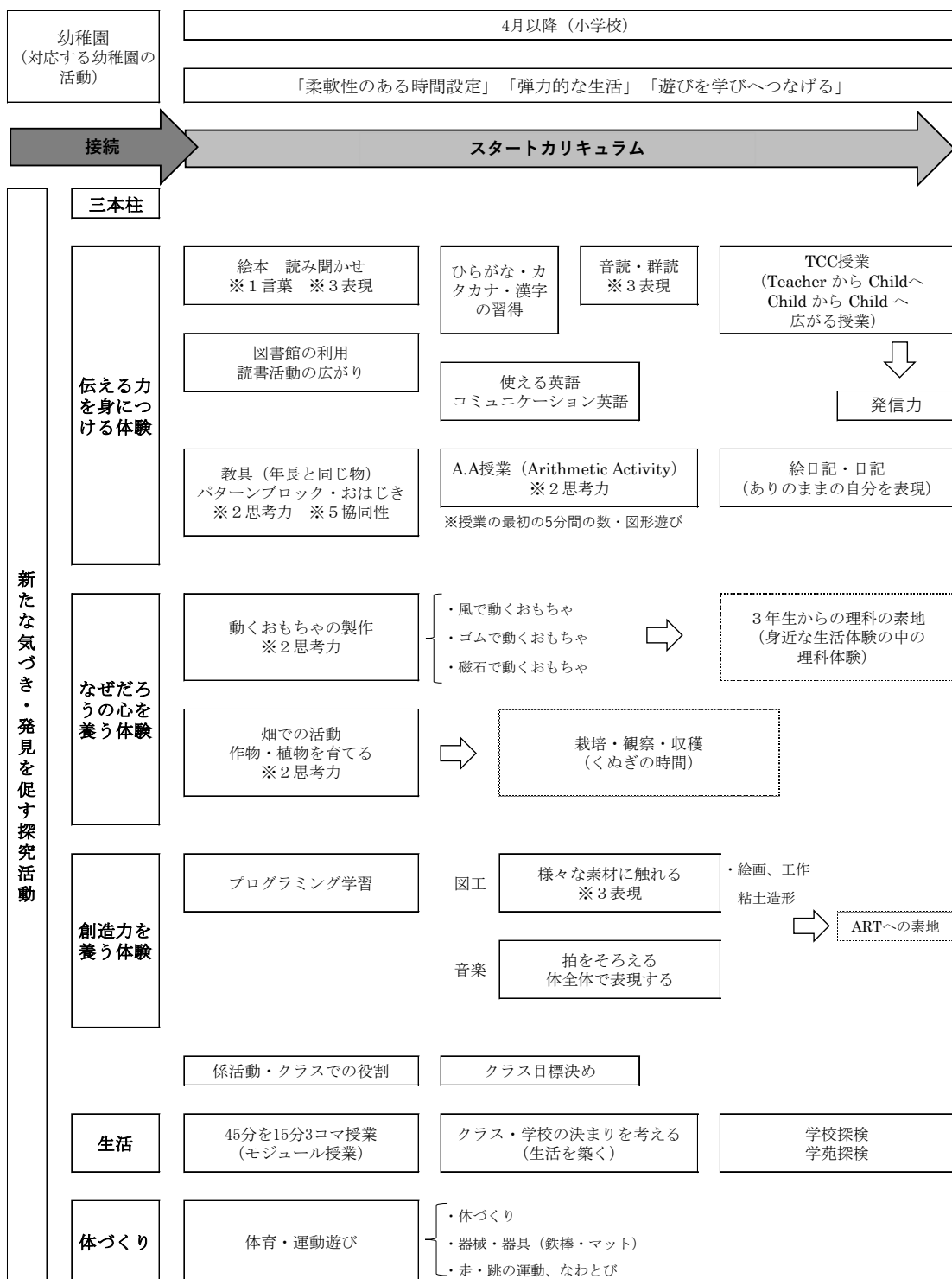


図3 明星小学校「スタートカリキュラム」(小学校1年生4月以降)

①「約束事」の扱い方

小学校入学後、建物も大きくなり、人数も多くなり、幼稚園や保育園の頃とは大きく異なる生活環境に戸惑う様子が見られる。また、小学校には様々な決まりがあり、各学級にも決まりがある。係や担当などの役割も生まれ、多くの自己判断の場面がある。

そのような新たな環境の中で心がけたい点は、約束事を決めすぎないということである。様々なルールの中で私たちは生活しているが、学校生活も同じである。日々、友達や上級生、先生や保護者との関わりの中で生活していく。その中で、守らなければならない約束事はたくさんある。大切なことは、それまでの経験を踏まえ、子ども自身に考えさせることである。答えを初めから伝えるのではなく、どうしたらよかったのか、なぜそうした方が良いのかなど、思考を巡らせる機会を作ることである。幼稚園や保育園では、上述したように意図的にそうした場面を作ることも多い。小学校入学後も同様に投げかけ、自分で判断し、理解する営みを大切にしたい。

② 発想を実現できる多くの経験を持たせる

子どもたちは発想力が豊かで、様々なことに興味を持ち、チャレンジしたがつている。幼稚園や保育園では遊びが中心の教育を経験してきているからだ。学級づくりのなかでも同様に、発想を実現できる場面を多く作っていききたい。あんなこともできる、こんなこともできる、できないと思っていたことができたなど、自分の意見や発想が形になった時の喜びを1年生で感じる事ができたなら、6年間でどれほどの成長を見せてくれるだろうか。

上述したが、新しい指導要領では、子どもたち一人ひとりが未来の創り手として、予測困難な社会の課題に主体的に取り組み、試行錯誤しながら可能性を発揮し、新しい価値を創造できるようにすることを目指している。自分の生活を自分の手でより良く作っていける環境づくりを心がけていきたい。

4.4.2. 幼小接続の施策（小学校）

（1）スタート時の受け入れ態勢

（ア）柔軟性のある時間設定

幼稚園や保育園との生活で大きく異なるのが、時間的な制約である。全校児童が一律の登校時刻で一日をスタートさせ、45分間の授業を1年生は一日5コマ、時間割に沿って授業を行なっていく。入学したての子どもたちには、なかなか馴染みにくい生活リズムである。

そこで、明星小学校では、スタート時の生活時程をモジュール時間にすることを計画的に行い、時間割にとらわれることなく、小学校に慣れるための時程で生活をスタートさせる。

具体的には、1単位時間45分間の授業時間を、およそ15分間を3コマに分割し、集中力を途切らせないように心がける。教科の組み合わせは様々だが、合科的な学習展開も十分意識し、計画を立てる。

表4はモジュール時間割のモデル例であるが、およそヶ月程度の期間を段階的に通常時程へ近づけていくようにする。

表4 明星小学校 モジュール時間割モデル例

モジュール時間割 4月中									通常時程			
				月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日				
朝の支度 自由遊び		~	8:20						朝の支度 自由遊び		~	8:20
朝の会	8:25	~	8:35						朝の会	8:25	~	8:35
朝国語	8:35	~	8:50		生活	生活	生活		朝国語	8:35	~	8:50
1校時	8:55	~	9:10	算数	算数	音楽	国語	音楽	1校時	8:55	~	9:40
	9:10	~	9:25	国語	道徳		算数					
	9:25	~	9:40									
	9:40	~	9:45							9:40	~	9:45
2校時	9:45	~	10:00	国語	生活	国語	算数	体育	2校時	9:45	~	10:30
	10:00	~	10:15	算数	国語		算数					
	10:15	~	10:30				国語					
ほのぼの	10:30	~	10:45	生活					ほのぼの	10:30	~	10:45
	10:45	~	10:50							10:45	~	10:50
3校時	10:50	~	11:05	生活	国語	算数	図工	算数	3校時	10:50	~	11:35
	11:05	~	11:20	国語		国語		国語				
	11:20	~	11:35			道徳						
	11:35	~	11:40							11:35	~	11:40
4校時	11:40	~	11:55	算数	生活	体育	図工	算数	4校時	11:40	~	12:25
	11:55	~	12:10	国語	国語			国語				
	12:10	~	12:25									
昼食 昼休み	12:25	~	13:10						昼食 昼休み	12:25	~	13:10
	13:10	~	13:15							13:10	~	13:15
5校時	13:15	~	13:30	体育	英語	国語	英語	学活	5校時	13:15	~	14:00
	13:30	~	13:45			算数						
	13:45	~	14:00									
着替え 帰りの会	14:00		14:20						着替え 帰りの会	14:00		14:20

(イ) 弾力的な生活

入学直後、慣れない環境や通学の疲れなどに配慮して、明星小学校では3日間は昼食をとらずに11時頃に下校させている。4日目からは、昼食をとって下校となるが、上述したように、1単位時間45分間の授業時間にはとられず、急がず、焦らずにモジュール時間を計画し、新入生の実態にあった生活時程を心がける。そのなかで、小学校の約束や着替え、校舎内の特別教室の場所を覚えるなど、一つひとつ時間をかけ、ゆっくりと丁寧に確認しながら活動を進める。

表5 明星小学校 入学直後の生活

	入学後3日間	入学後4日目以降	入学後1週間	入学後1週間以降
昼食	なし	あり	あり	あり
下校	11時	14時20分	14時20分	14時20分
送迎	あり	あり	あり	段階的に一人通学

(ウ) 遊びを学びへつなげる

小学校での学びは、幼稚園や保育園での遊びが土台となっている。このため小学校の各教科の教科書も、1年生の興味・関心を惹く構成になっているが、明星小学校では、学習教材も遊びを意識したものを多く採り入れるようにしている。

算数では教科書を見ながら数を覚える、数えるだけでなく、積木やブロックなどで慣れ親しんできた経験を活かし、具体物を自分で操作しながら学んでいく。

生活科（明星小学校では「くぬぎの時間」と呼んでいる）では、お芋掘りや昆虫採集などの経験を活かし、自然のなかに身を置く活動の時間を多くとり、畑で作物や花を育てたり、風やゴムで動くおもちゃ作りをしたりなど、理科的な要素も取り入れながら学んでいく。このように、子どもたちの興味・関心を高める教材を選び、飽きさせない授業づくりを心がけている。今後は、パターンプロック、絵本やおはじきなど、明星幼稚園の年長クラスに置かれている遊び道具や本と同じものを1年生教室に配置し、子どもたちが幼稚園での遊びや学びを継続できるという安心感を持たせる環境作りをしていくことも今回の研究の結果、試行していく点である。

(2) 探究活動から探究学習へ～これからの学び方～

明星幼稚園と明星小学校の学びの接続プログラムとして、「探究」がこれからの大きなテーマとなってくる。

明星幼稚園での探究活動は、「Ⅰ. 伝える力を身につける体験」、「Ⅱ. なぜだろうの心を養う体験」、「Ⅲ. 創造力を養う体験」と、大きく三つの柱立てとする予定である。「互いに刺激し合いながら劇発表を行ったり、英語に触れたりする言語体験」、「自然科学を感じられる五感を通して感動を味わう体験」、「年間の四季折々の行事にまつわる創作体験」など、幼児期の主体的な体験活動を通じ、思考力、判断力、表現力の素地を培うこととしている。

この幼稚園での探究活動を小学校でさらに学びの探究へとつなげるために、明星小学校でも、主に総合的な学習の時間（生活科と同様に「くぬぎの時間」と呼んでいる）を活用し、探究学習の研究を進めている。

小学校学習指導要領上の「総合的な学習の時間」の目標を念頭に置きながら、2023年度本格実施に向けた探究学習の研究を進めている。「主体的に学び、他者と協働しながら、自己発信できる子」の育成をねらいとしているが、その学習は多角的な学びの機会を想定して

いる。

「プログラミング教育」、「キャリア教育」、「STEAM 教育」、「SDGs」などが挙げられるが、学年や発達段階に合わせて個人課題を設定し、課題解決に向けて情報を収集し、整理、分析したり、友達との意見交換や協働したりしながら学習を進めていく。児童の思考力、判断力、表現力などを育むなかで、これからの時代に求められる資質を伸ばしていきたいと考えている。

さらに、汐見（2021）は「当事者性」について言及しているが、様々な課題を自分のこととして捉えながら学習を進めていける当事者意識もこれからの世の中に求められる大切な資質である。

明星幼稚園での「探究活動」は明星小学校でのより形が見える「探究学習」（図4）として発展させていきたい。

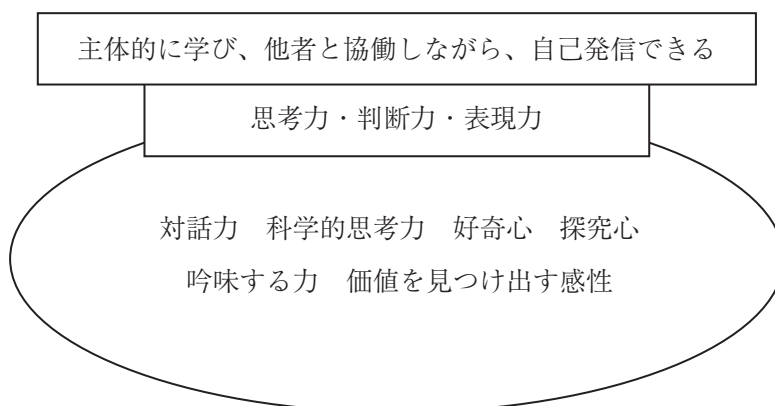


図4 明星小学校 探究学習の概念図

4.5. 今後の課題

今回の研究を行った結果、「なだらかな接続」を実現させるための幼小連携活動では、「互恵性」のある活動を行っていく必要があるという点が明らかになった。互恵性とは、子ども同士、大人同士が互いの主体性を理解し、受け入れ合える関係ということであり、そのためには、教師間の理解を深める研究や研修の場、積極的な意見交換の場の確保を年間のスケジュールに入れ込み、「組織」として取り組もうとする姿勢が必要である。

本研究では、年長組後期（9月～）のアプローチカリキュラムを作成したが、今後は年少組（3歳児）からの定期的な交流の場をさらに加えた明星幼稚園独自のアプローチカリキュラムを作成することが望ましいと考える。

総合学園という特色を活かし、年少組から日常生活の中で定期的に小学校を知る場の設定（授業風景の見学、小学校教員やお兄さんやお姉さんと話をする場）などの関わり合いを持つことにより、小学校という存在を幼い頃から認識し、将来の自分の姿を想像することができる。結果、年長組では3年間の経験から就学に対しての期待や憧れをさらに持つことがで

きるのではないかと考えられる。

また小学校教員も今までの交流活動では、就学に近い年長児との関わりが多くなりがちとなっていたため、子どもたちの発達過程を知る上でも、年少組の生活の様子や友だちとの関わり方、園生活の流れを実体験し、幼稚園の3年間で子どもたちが得る学びや遊びの変化を見る機会を設定することが望まれる。

さらに幼稚園教員・保育士も同様に、幼稚園で得た学びの力をどのように小学校に活かしていくのかを実際に体験する機会を設け、「育ち」と「発達」についての理解を深める必要がある。

個々の教員が持っている幼小接続に関する理解や取り組む観点の違い、各々の知りたいことの違いなどを明確にしながら、長期的なカリキュラムの作成と見直しを行う研究会などを通じて個々の教員が研究を行う機会を設けることが効果的であろう。すべての教員が長期的な子どもたちが成長する姿を想像し、一過性ではない継続的に連携できる体制とそれを実践できる場をいかに設けるかが今後の一番の課題となろう。

5. 謝辞

本研究を行うにあたり、聞き取り調査にご協力いただいた、寶來生志子先生、石田恒久先生、後藤健先生、片野徹様に深謝いたします。研修会を通じて必要な知見を教授いただいた齋藤政子先生、鎌倉博先生、そして研修の機会を設けてくださった太田素子先生にも感謝の念を表します。また本研究を通して多くの知識や示唆をいただいた国立大学法人山口大学の岩野摩耶先生に深く感謝いたします。

本研究は公益財団法人東京都私学財団 2021 年度私立学校研究助成事業の助成を受けたものです。

文献

秋田喜代美・第1日野グループ編著（2013）『保幼小連携 育ちあうコミュニティづくりの挑戦』：ぎょうせい

有嶋誠（2019）「幼稚園の「遊び」から小学校の「学び」への円滑な接続に関する一考察 ～スタートカリキュラムを支える「学びやすい環境づくり」への提言～」『宮崎学園短期大学紀要』Vol.11, 1-13

大江康夫・永利陽一（2017）「幼小接続の実態と課題」『九州大学紀要』第54巻1号, 105-122

岸野麻衣・無藤隆（2007）「幼児教育と生活科教育の特徴と相違：幼小連携に向けて」『白梅学園短期大学 教育・福祉研究センター研究年報』No12, 41-50

木下光二（2019）『遊びと学びをつなぐ これからの保幼小接続カリキュラム：事例でわかるアプローチ & スタートカリキュラム』：チャイルド本社

木村光男（2019）「幼少連携における諸問題と背景」『常葉大学教育学部紀要』第39号, 249-258

國學院大學（2019）「幼児教育と小学校教育には大きなギャップがある？吉永准教授が語る幼少接続の意義と課題（前編）」『國學院大學メディア』
(<http://www.kokugakuin.ac.jp/article/108139>)（2021年9月10日）

国立教育政策研究所（2015）『スタートカリキュラム スタートブック』
(https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_mini.pdf?time=1423123582117)
(2021年10月17日)

汐見稔幸（2021）『教えから学びへ 教育にとって一番大切なこと』：河出書房新社

田澤里喜・吉永安里編著（2020）『幼児教育から小学校教育への接続』：世界文化社

ベネッセ教育総合研究所（2012）「なぜ今「保幼小接続」に注目するのか？－保幼小接続に注目する背景と今後の方向性」(<https://berd.benesse.jp/berd/focus/2-youshou/activity1/>)（2021年9月10日）

文部科学省（2010）『幼児期の教育と小学校教育の接続について』（幼児期の教と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議 配布資料3）

(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/070/gijigaiyou/__icsFiles/afldfile/2010/06/11/1293215_3.pdf)（2021 年 10 月 17 日）

文部科学省（2017）『幼稚園教育要領』（https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf）（2021 年 10 月 17 日）

横浜市（2018）「第5章「スタートカリキュラム」」『横浜版接続期カリキュラム平成29年度版』（<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kosodate-kyoiku/hoiku-yoji/shitukoujou/renkei/20170216154302.html>）（2021 年 11 月 1 日）

注

本報告書内記載の役職は、文献記載及び聞き取り調査時のものである。

お問合せ、ご連絡は下記までお願いします。

「なだらかな接続」に向けた幼稚園および小学校における施策に関する研究 報告書

©2021 年 12 月 発行

発 行 〒183-8531 東京都府中市栄町 1-1

明星幼稚園 電話 042-368-5110

印 刷 〒183-0045 東京都府中市三好町 1-1-20

有限会社くらうん工房 電話 042-368-7891